

社研に入ってよかったな

榎 貴志（教育・昭和61年卒 弘済会）

岡山県で高校まで過ごした後、大学入学から現在に至るまで香川県でお世話になっている。入学後も当面自宅から通学することにしていたが、高松への交通手段は「船」のみであった。ところが、入学式の翌日は濃霧により、午前中に行われた講義等に関するガイダンスに参加することができなかった。昼頃には霧が晴れ、やっとの思いで研究室にたどり着いたところ、笑顔で出迎えてくれた先輩の車に乗せられ、香東川の河川敷でソフトボールの練習をした。研究室に帰ると、「男組」の始まりである。何の集団かよく分からないままだったが同期の仲間も一緒にいることで心を強く持って参加した宴では、4年生を筆頭に、「兄貴」というよりも「叔父さん」に近い先輩の男ばかりが集まって、自己紹介したり高校の校歌を歌ったり、研究室の集合写真を見せられて「好きなタイプは誰か?!」と聞かれたりした。高校生活とは全く違う縦の関係と、一人一人のキャラの強烈さに驚くことばかりであった。その夜は、1学年上の先輩の部屋に泊めてもらうことが習いとなっていて、目を覚ますとバンダナを巻いた先輩の部屋でお世話になっていた。当時は、1年生の時から研究室に所属しており、大学の授業については、先輩方にあれこれアドバイスをいただきながら、時間割を組み立ててもらった。これが「社研」と私との出会いであった。

このように始まった私の大学生活は、社研での生活が土台となった。部活動にも参加していたので、平日の夕方は練習に行くのだが、昼間は同期と話をしたり研究室に立ち寄ったりして時間を過ごした。夏前に下宿を始めてからは、更に社研の仲間と過ごす時間が多くなり、先輩から紹介されたアルバイトをしたり、年間数回の「男組」を行ったりして、楽しく刺激的な4年間を過ごすことができた。

教員としてのスタートは、教育事務所からの電話で初めて名前を聞いた島であった。同期の仲間は、高松市内やそれぞれの地元で教員生活をスタートしていたので、大学時代とは大きく違う生活となった。ただ、教員生活を通して何度かの異動を経験し、立場を変えながら研修会などで社研の仲間と出会うことがあれば、一瞬で大学時代に戻ることができた。教員生活の後半に入ってから、ネットワークづくりが得意な同期のおかげで、社研の先輩、後輩と再会する機会が増えた。さらに、松楠会総会の日に、小さな同窓会を開く機会も得て、懐かしい話や現在も活躍する話を聞くことができる幸せを感じている。大学を卒業して40年以上となる今になって、「社研に入ってよかったな」と改めて感じる日々である。